



# 船 団

● 第89号 特集II マンガと俳句

## 互評の場を開く

坪内 稔典



「俳句は句会のみまてある」と繰返してきた『俳句のユーモア』岩波現代文庫ほか)。だが、やや意外なのだが、今日ではちゃんとした句会があまり行われていないのではないだろうか。

- ・ 作句 (兼題、席題、吟行など)
- ・ 投句 (無署名)
- ・ 清記 (投句の清書)
- ・ 選句
- ・ 披講 (選句の発表。音読)
- ・ 合評 (互評)
- ・ 名乗り (作者名の発表)

句会の一一般的な手順を示した。ここで特に大事なことは句が無署名で投じられること。つまり、作者がだれか分か

らない状態にして句会が進行することである。第二のポイントは合評がきちんと行われること。

無署名で投句することは普通に行われているが、合評の省かれる句会が多いのではないだろうか。特に俳句結社の句会では主宰者、あるいは選者が感想を述べて終わるという句会が多いと聞く。合評を省いたそういう句会は、句会というより俳句の入門講座である。

無署名で投句することは、言うまでもないが、作者よりも作品を重視する、ということだ。句会では誰が作ったかはまずは問題でない。それよりも、どんな句であるかが問題だ。

どんな句であるかは、選句を通して焦点化される。選句ではその句会での人気度が判明するが、それを元にして合評が始まる。選句は合評のための手がかり、あるいは合評の素材だと言つてよい。

さて、その合評だが、『広辞苑』は次のように解説している。「いく人かの人が集まって同じ問題や作品について批評すること。また、その批評」。合評はこの解説のとおりだが、問題はその合評の進め方である。

連句の座では一巻の進行をさばく人がいた。そのさばき手が俳諧の宗匠(俳人)であった。芭蕉も一茶もそのような宗匠であったのだが、連句から俳句の時代へ移ったとき、

さばき手としての宗匠が、句の良し悪しを判断する選者に姿を変えたのではないか。そしてその選者が、近代の俳句結社の主宰者として存在するようになったのではないか。

ここで連想するのは、「選と云ふことは一つの創作であると思ふ。少くとも俳句の選と云ふことは一つの創作であると思ふ」という高浜虚子の言葉だ。昭和六年に出た『ホトトギス雑詠全集』の序にある言葉だが、確かに何を選び出すかは選ぶ人の創作的行為である。そのことに異論はないが、この虚子の言葉が、俳句の選者というものの抛り所になったのではないだろうか。句会において選者（しばしば結社の主宰者）が選んだ句が絶対視されるのである。そうなるも、もはや、合評は行われぬ。行われたとしても選者の意見で決着してしまうので本来の合評にはならない。

本来の合評とは、誰もが自由に意見が言え、その意見が互いに検討されるものだ。句会における選句を互選と呼ぶことがあるが、その呼び方にならうなら、句会の合評は「互評（ごひょう）」と称してもよい。互いに言いたい事を存分に言い合うのだから。

互評が効果的に行われるためにはそのさばき手がいる。しゃべりたい人が勝手に発言するだけでは意味がない。互いの意見を付き合わせ、そこから俳句の課題を取りだす

能力がそのさばき手には要求される。選は創作だと言った虚子の場合、それは句会とは直接には関係なく、虚子自身の選ぶ能力の問題だった。だが、句会のさばき手には、彼自身の選ぶ能力と共に、互評を高めるといふ能力が要求される。今はやりの言い方をすればそれこそが「俳人力」であろう。

互評を高めるとは、互いの議論の中から、互いがよいと思う句を見つけることだ。そこでは、推敲も行われるであろう。この句はこのようにしたらよい、という意見が出て、それが適切であれば、句会は創造の現場になる。

その場合、句会のさばき手の能力が問われることは言うまでもない。さばき手に俳句の表現史などについての理解がない場合、あるいは実験的なものへの好奇心がない場合、おそらく句会は退屈である。そこで話題になる句も平凡であらう。

もつとも、さばき手が自分の思いだけで進行する句会はさらに問題だ。それはさきに述べた人門講座のようになる。さばき手、すなわち句会を進行させる司会者もまた、自分を互評の中で相対化しなければならぬ。いや、相対化へと心身を開いておかねばならない。司会者にその姿勢がなければ、当然ながら互評の場の活性化がありえない。ともあれ、句会に互評の場を生き生きと開きたい。



# 会員作品

坪内 稔典

水の湧く日和まっかな寒椿  
ドイツ系男子であるかこの海鼠  
あんパンは粒あん雪は牡丹雪  
オランダの木橋にあいつのいる余寒  
耳がとつてもくすくすとして春の雷  
古墳からとびだす子ども風光る  
大野さんになりたい日だな風光る

中林 明美

海光る猿曳きサルを肩に置き  
芹という冬の青さを食べている  
青年ら初弘法の紐をとく  
ぼたん雪谷間のこだまとも思う  
雪原という真っ平詩の一行  
じゃんけんの鶯餅で戦済む  
風光るアンリ・マチスの縞のシャツ

中原 幸子

鏡餅母よく怒る母なりき  
さあちゃんと水仙が咲くようにいう  
春はあけぼの乱数表に着火せよ  
矢つ張りなふーんふーんとチューリップ  
さざえ壺焼あんたいくつになりはったん  
黄落のまんなかへんの烈女伝  
ものの上ものの下など十二月

火箱 湖歩

椅子たちがのんびりしてる冬日向  
大枯野君は耳から透きとおる  
酢なまこに地震速報流れけり  
六波羅のぽつと明るいまかんかな  
地図上はこんなに近い雪しんしん  
しくしくと寒月光にある匂い  
勾玉は胎児のかたち山眠る

陽山 道子

冬星を指で繋いで大男  
雪が降る人差し指は誰のもの  
新雪をのたうち回るドラえもん  
朝に立つ明朝体の寒たまご  
霜踏んで頭の中のがらんどろ  
行く先はひとつひらいた寒牡丹  
寒椿空に涙を返したら

ポン菓子

平井奇散人

ポン菓子や町村合併雲の峰  
公園のドボルザークや夏あざみ  
パン種を無心にこねるひでり梅雨  
夏の夜の妄想しばしみそラーメン  
枇杷の実や一家団欒はいポーズ  
夕凧やB級グルメコンビ靴  
草茂るピアスの易者細い頸